横浜市民広間演奏会のあゆみ　第３幕　＜市民コンサート＞そして＜自主運営＞へ

第２幕では、開始当時の＜市民広間演奏会＞の市庁舎コンサートの様子を取り上げました。今回はその後の横浜市民広間演奏会の活動、そして自主運営までのいきさつを取り上げます。

佐藤美子先生の「市庁舎を訪れる人々に良質な音楽を提供する」という思いに共感し、活動を共にする会員も徐々に増え、現在の＜特別演奏会※[1]＞にあたる＜市民コンサート＞も１９８０年より開始されました。佐藤先生を中心に運営委員会のメンバーによって楽器、曲目など、バランスよく配し、一貫性をもたせたプログラムを市民の方々に届けようと苦心したそうです。プログラムの印刷は市の全面協力で、上質の紙を使用した当時としては豪華なプログラムでした。会場は現在の関内ホールのある場所に＜横浜宝塚劇場＞が存在し、１９７０年代より＜市民ホール＞の名でこの建物が利用されており、このホールで行われました。それまでは市庁舎ロビーでのコンサートでしたので、佐藤美子先生は「これはごほうびなの。」と、喜んでいらっしゃったそうです。

しかしこの＜市民ホール＞残念ながら、音響はあまり良くなかったようです。
「まだ映画館の面影がある古いところで、音響も最悪でした」（会員談）
このコンサートの２年後の１９８２年、佐藤先生はオペラリハーサル中に倒れ、惜しまれつつお亡くなりになりました。

１９８３年からは三宅洋一郎先生が会長に就任されました。
三宅先生はフェリス女学院大学の音楽部の設立に貢献され、日本音楽コンクールにそのお名前が冠された＜三宅賞＞があります。三宅先生が会長に就任したこの年より＜市民広間演奏会＞会員募集のオーディションが開始されました。以来、会員はオーディションにより入会することになりました。
１１月に行われたオーディションは、西公会堂、保土ヶ谷公会堂で開催。
申込者 103 組、参加者 82 組、合格者 22 組、倍率 3.72 とあります。

そして３年後の１９８６年１０月＜２０周年記念市民コンサート＞が行われました。会場は９月に開館したばかりの関内ホール。音響の良い真新しいホールでのコンサートに当時の会員は胸が躍ったことでしょう。この時の会員数は１３２名でした。

この時代は好景気、バブル、と日本経済に勢いがありました。横浜市から助成を得、市役所、特別演奏会を中心に活動していました。その後も順調に活動しておりましたが、１９９４年、会と苦楽を共にしてきた三宅先生がお亡くなりになりました。

１９９５年より、中村義春先生(現名誉会員)が会長に就任。
この年の１月「兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)」が発生。３月には「地下鉄サリン事件」が発生しました。つらい事件が次々と起こり、気持ちがふさぐ中、音楽は人々の大きな力になったのではないでしょうか。ふと訪れた市役所でのコンサート、そして無料で行われていた＜市民コンサート＞は人々の心の糧となっていたと思います。
しかしながら、日本経済も低迷期。とうとう２００１年の末、市から「助成を続ける事が出来ない。予算が下りない。」と通達されました。そのため翌年の１月、関内ホールの地下にて、存続か否かの話し合いがもたれました。

「雪の降った日でしたが、沢山の会員が集まり、熱心に話し合った事を今でも鮮明に覚えています。」（会員談）

話し合いの結果、自主運営の団体として活動を継続することになりました。その時、活動を継続するにあたり、大きな問題となって立ちはだかったのが拠点づくりでした。
それまでは、話し合いの場所、資料作り、電話(窓口)など全て市役所で行ってきましたが、それが出来なくなってしまったのです。事務局を借りるにも市の助成がなく、収入のない団体が家賃を払うことは出来ませんでした。

「当時ヤマハさん※[2]が事務局を引き受けて下さらなければ、会の存続はままならなかったと思います。本当にありがたかったです。」(中村義春先生談)

ヤマハのお力添えで拠点も定まった横浜市民広間演奏会でしたが、今後は収入を確保しなくてはなりません。市の補助を受ける補助事業としての復活要求は通りましたが、収入無しでは補助してもらうことが出来ません。まずは、会員から会費を徴収し、オーディションも有料になりました。しかしその収入だけで会を運営することは難しく、市役所から飛び出して、様々な場所でコンサートを行う必要が出てきました。

※[1]2020 年より＜横浜市民広間演奏会 特別演奏会＞は、名称を＜定期演奏会＞と改め開催したします。
※[2]ヤマハミュージックリテイリング 横浜店